

戦没者の子



野市町 弘田 忠士

私が社会人と

島班に参加しました。

してスタートし
たのは、地元野
市町役場に奉職
した昭和三十年

春からだと言えます。

昭和三十二年一月、高知県遺族会は
将来に向かって遺族運動を発展継続し
ていくためには「青少年部」の創立が
必須条件であることから、県下の遺児
代表百名を招集し「高知県遺族会青少
年部」を結成しました。

母が遺族会の世話役の関係もあり、
私は青少年部に加入はしていました。
そして、何らかの役員に名前を連ねて
いました。しかし、これといった活動
はしていませんでした。

時は流れ昭和四十八年八月、私も三
十七歳になっていました。県の遺族会

事務局より、政府の厚生省主催による
遺骨収集の団員募集があるが参加でき
ないかと連絡があり、職場の上司など
に相談した結果、理解と協力が得られ
参加することになりました。

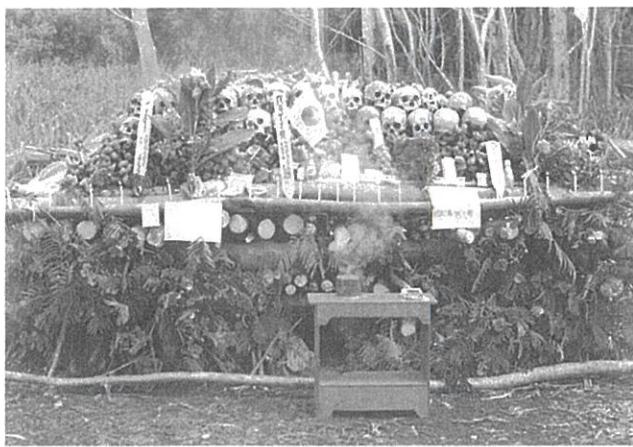
父は海軍でしたので、遺骨は軍艦と
ともに海底で眠っているはずですが、
せめて少しでも近くの島に行つてみよ
うとの思いでマリアナ諸島のテニアン

ジュークーンは、地上ではジャングルと
言われ、人々の侵入を拒むかのよう
に、中は薄暗く、タガントガンやタコ

の木に足を取られ、服や荷物を引つ張
られる条件でガイドの枝払いの後をつ
いて行くのが精一杯です。

岩の割れ目を懐中電灯で照らすと一
つのご遺体が横たわっているのが見つ
かりました。ガイドが地下二〇メート
ルはあるので収骨は危険過ぎるので諦
めようとの話でしたが、自分たちは
三十年も放置してきたご遺骨を見捨て
る事はできないと、ザイルなど使つた
事はない者ばかりでしたが無事収骨す
ることができました。このご遺体は風
雨に曝される事が少なかつた為か、地
上から離れていたのでヤシガニに食べ
られる事もなく完全な姿が保たれたも
のと思われます。枕元には撃ち抜かれ
た水筒と二個の手榴弾そして赤く錆び
た鉄兜がありました。他に遺留品は発
見する事が出来ませんでした。袋に無
事収骨し地上に戻った際は団員一同
「よかつた」「よかつた」と果たし得た
使命感に満悦したことでした。

また、三十疊程の岩陰に三十数体の
ご遺骨を収骨しましたが、その内に一
つ小さな頭骸骨がありました。これは
幼児であつたと思います。この頭骸骨
も鉄砲で撃ち抜かれていました。これ
は日本人の誰かが、もうこれまでと子
供の命を絶つたのか、それとも米軍に
射殺されたのか、どちらにしても罪の
ない子供を：悲惨！哀悼の意を深くす
る次第です。これが戦争なのか、もう
二度と戦争をしてはいけない。合掌！



そして日本人が生活していた証とし
ては、コンクリート製の神社の鳥居が
何か所かに残っていました。

八月七日 第一日目の収骨作業は日
本軍が最後の攻撃を決行し、全員が玉
碎したと言わているカロニナス台地
の探索でした。機上から見た緑の

毎日の作業でも収骨が少ない日には

気が重いし、多数収骨が出来た時は肩に背負った袋が重く歩くたびに「コツコツ」と音がします。袋の中の親父たちが「息子よ！重かろう、すまんのう、俺たちにはもう歩く力が無いきに、よろしく頼むよ」「親父！息子にまかしちょき、遅くなつたが、家族が待ちゆう懐かしい故郷に一緒に帰ろう」などと心で話合いながら、ただ黙々と歩いたものでした。

テニアン島ではA・B二班合わせて二

千三百八柱の収骨が出来ました。八月十三日焼骨式を行い団員の読経が流れれる中、高く積まれたご遺骨に点火し茶毘に付しました。三十年前の苦しく悲しい出来事を乗せた黒煙は青空に棚引き静かに故郷へと消えて行きました。

島民の方々は大変親日的で、焼骨祭、追悼式には多くの島民が参加してくれ、厳粛盛大な式典を挙行することができました。

また、限られた日数と人員では到底

全部のご遺体収骨は出来ません。これ

からも我々の後継者が残されたご英靈は迎えに来ることをお誓いし、心苦しくて後ろ髪を惹かれる思いでいっぱいでした。が、ガイドや休日のバレーボールで親しくなった子供たち、そして多くの島民に見送られて機上の人となりました。感謝！

平成十一年九月、沢山の楽しかった事や苦しくて逃げだしたかつた事など多くの思い出を土産に、六十二歳で職

場を離れることができました。随分長い間家庭の事は、手付かずでしたので、少しの田畠の管理を眞面目にしようとしました。そして、何時の間にか県下的なものから小さなグループ活動的にしました。今まで二十三団体ほどになります。この際と六十の手習いでパソコンに挑戦することにしました。

二十数件の団体に関係し、幾つか代表者の席も引き受ける事になりました。その内一番関係したのは遺族会関係でした。

平成十三年頃、県下の遺族関係者が集い会議終了後希望者で一杯やついていた席での話ですが、先輩らしき人が、「弘田さんよ貴方のお父さんは「フィリピンでの戦死じやないかね」「フィリピンの近くの海です」。答えると「じゃ！フィリピン会に入ってくれんか」とのこと「考えてみます」との答弁でこれは一区切り終わり、杯を重ね周辺の声が高くなつたころ、先輩らしき人が、「おまんは何年生まれぜよ」「〇〇年です」と返事をすると「あしと同年、同級生じゃ」となり、〇〇さんのさんが即〇〇君に変わり、いや、君も消え〇〇となり、宴会も一段と盛りあがつて、場所を変えとなつたようでした。肝心なフィリピン会加入の事は

令和の時代になり八十歳を超すと耳に仲間入りし活動に参加していました。「ある面「土佐の宴会」は要らない物（事）は直ぐに淘汰されます」今はコロナ騒動で何か物足らない気がして寂しいですね！

物（事）は直ぐに淘汰されます」今は弱気を捨て「老骨に鞭打って」もう少しの間頑張つてみますか。よろしくお願いします！

戦没者遺族の妻として

四万十町 坂本 京子



主人が厄年も過ぎてしばらくして、急にフィリピンに遺骨収集に行ってみた

県遺族会でお世話になり、勤務先にいとquot;出しました。今まで養父には少し遠慮もあり考えた末のことでしょう。

長期休暇のお願いを日本遺族会会長から丁寧な文書でいただき参加できるこ

となりました。昭和五十七年の遺骨

収集事業がフィリピンへ足を踏み入れる始まりで、主人が四十二歳の時でした。

その一ヶ月はすごく永い日々でした。

お月様が出たら子供三人と一緒に

始まりで、主人が四十二歳の時でした。

ご遺骨を探して掘っている様子を見

に地元の子どもや大人が大勢集まつて

いること、ご遺骨を焼骨する様子には茫然としました。

真っ黒に日焼けして頑張った主人の姿にご苦労様、貴男のお父さんの戦死された場所には行けなかつたけど、体調を壊さずに無事に帰つたことを誇り

は難聴に、目は字が読みづらく、体力は急な坂道を転げ落ちるように、自分の身体かと疑いたくなる始末ですが、弱気を捨て「老骨に鞭打って」もう少しの間頑張つてみますか。よろしくお願いします！

ご遺骨は厚生省にお渡しし、海外各地から帰還されたご遺骨を、もう一度焼骨し、毎年五月下旬に皇室の方も参列し拝礼式が行われ「千鳥ヶ瀬戦没者墓苑」に無名戦士として納められるこ

東京に帰り、やつと電話で声が聞け

間には早すぎ、交渉の末、ロビーで待たせてもらうことに。空腹で、朝食ブッフェが始まる七時を待ちかねて、たっぷりの食べ物が並び、興味深い。

その後、ホテルの自分たちのルームで小時間休憩し、徒步にて散策をする。行く当てもなくひたすら歩き続けると、古い教会にたどり着き、当時日本軍が占領していたという St. Au gustine 教会だということが後でわかった。戦時中は武器火薬庫として使われていたそう。教会裏には静かな公園があり、戦争前からあつたであろうか、古い大木が数々あり、ひょっとしたら祖父も戦争の束の間、この柔らかい風の中、一時だけでも心休まる瞬間があつたのではないだろうか、とふと思いつく。この空間を、二年の歳月を超えて共有できているのかも知れないと思った。

三月二十五日

早朝、ホテルをチェックアウトし、いよいよ祖父が亡くなつたというビンタウンのある Cauayan (カウアヤン) 向けてマニラ空港国内線乗り場に向かう。機内から、日本兵が苦しい思いをしながら敗走したと思われる山々を見下ろす。一時間少々で到着する。

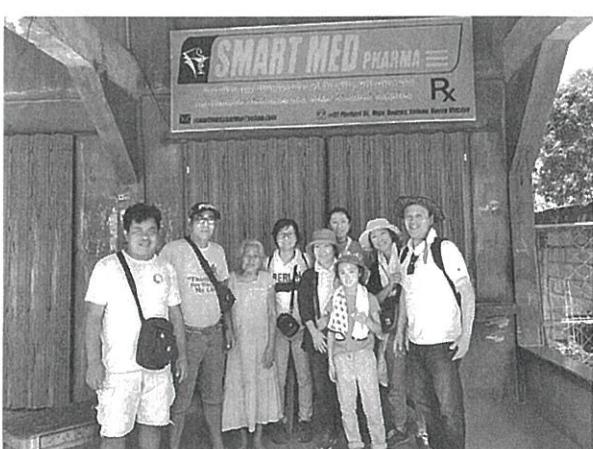
空港の小さな建物から出ると早速、暑い熱波が襲う。バスターミナルまで

は歩くにはしばらくあるらしく、ミニバイクのようなものの横にも二人ほど乗れる三輪車（トライシクル）で移動する。値段交渉は慣れてきた。

バスターミナルの横のスーパーで、少し食品を買い込み、ソラノ行きのバスに乗り込む。道中に見られる風景は高知の田舎のそれに似ており、田園風景にさぞ祖父も故郷を想つたに違いないと思う。

ソラノ到着後、予約していたホテルに荷物を置き、近隣を散歩し、明日のビンタワン行きについて現地の人尋ねるもの、その地を知っている人が見当たらず、明日が少々心配。

三月二十六日



ソラノのジプニー乗り場でしばらく交渉していると、一人ビンタワンのこない。何かに導かれるかのように中に入ると、外とは違い少しひんやりと気持ちがいい。黄色と青色のステンドグラスが美しい。この場所に祖父がいたのであろうか：何となくその存在を感じ、自然と「この場所で弔させてもらおう」という気持ちになり、祭壇を借り、日本からお供え用に預かって来ていた和菓子とソラノで買った水をお供えし、一同祈る。お菓子は母の双子の姉である叔母が一緒に旅行が叶わず、持たせてもらつたものだった。

外でると横には川が流れしており、その周りも歩いてみると、熱帯特有の木々に囲まれ、一箇所だけ竹が空に向かう。日本兵が苦しい思いをしながら敗走したと思われる山々を見下ろす。一時間少々で到着する。

空港の小さな建物から出ると早速、暑い熱波が襲う。バスターミナルまで

は歩くにはしばらくあるらしく、ミニバイクのようなものの横にも二人ほど乗れる三輪車（トライシクル）で移動する。値段交渉は慣れてきた。

バスターミナルの横のスーパーで、少し食品を買い込み、ソラノ行きのバスに乗り込む。道中には子供たちの姿をよく見かけた。皆にこやかに笑っているのが印象的だ。緑のマンゴーを仲良くかじりながら歩く男の子たちも見かける。にいるのだと実感する。

しばらく行くと教会を見つける。誰もいない。何かに導かれるかのように中に入ると、外とは違い少しひんやりと気持ちがいい。黄色と青色のステンドグラスが美しい。この場所に祖父がいたのであろうか：何となくその存在を感じ、自然と「この場所で弔させてもらおう」という気持ちになり、祭壇を借り、日本からお供え用に預かって来ていた和菓子とソラノで買った水をお供えし、一同祈る。お菓子は母の双子の姉である叔母が一緒に旅行が叶わず、持たせてもらつたものだった。

しばらく歩くと珍しく立派な建物があり、中で聞いてみると市役所だという。日本から来ていると告げると、ピンク色のTシャツを着た市役所職員たちが次から次へと歓迎してくれ、突然の来訪を喜んでくれ、それにはこちらもびっくりする。近くにあるという、何十年前に建てたという日本兵の合同墓地に案内してもらう。祖父に導かれてここでやつと会えた気がした。Japanese shrine と書かれたセメントでできた墓地には、近くの大木の下で見つかったという日本兵

とを知っている人がおり、その人と、後数人のトライシクルに乗り三十分ほど行ったと思う。

村の入り口でおろしてもらう。さあ、ここからどう行けば何が見つかるのか：

道中には子供たちの姿をよく見かけた。皆にこやかに笑っているのが印象的だ。緑のマンゴーを仲良くかじりながら歩く男の子たちも見かける。にいるのだと実感する。

しばらく行くと教会を見つける。誰もいない。何かに導かれるかのように中に入ると、外とは違う少しひんやりと気持ちがいい。黄色と青色のステンドグラスが美しい。この場所に祖父がいたのであろうか：何となくその存在を感じ、自然と「この場所で弔させてもらおう」という気持ちになり、祭壇を借り、日本からお供え用に預かって来ていた和菓子とソラノで買った水をお供えし、一同祈る。お菓子は母の双子の姉である叔母が一緒に旅行が叶わず、持たせてもらつたものだった。

しばらく歩くと珍しく立派な建物があり、中で聞いてみると市役所だとい

う。日本から来ていると告げると、ピ

ンク色のTシャツを着た市役所職員たちが次から次へと歓迎してくれ、突然の来訪を喜んでくれ、それにはこちらもびっくりする。近くにあるという、何十年前に建てたという日本兵の合

同墓地に案内してもらう。祖父に導かれてここでやつと会えた気がした。J

apanese shrine と書かれたセメントでできた墓地には、近くの大木の下で見つかったという日本兵

達の遺骨を祀っているという。祖父もここに安眠しているのであろうか：眠っているような気がした。ここを訪れた日本人はなんでも三十、四十年前だつたらしい。ここまで不思議な導きで祖父の足取りが少し分かつたような気がした。十一人の職員の方たちにお礼を言い、後にする。

その後、ビンタワンの村で見つけた小さな食堂でお昼をとり、その場に大勢いた中学生達と知り合い、会話をし、最後には十人ほどいた彼ら全員が歌を歌ってくれ、純朴で美しい彼らの笑顔に癒され、また感謝の思いいっぱいビンタワンを後にすること。

夕方には次の宿を予約しているラガウエまでジブニーに乗る。山の中で場所がわからず、しばらくウロウロするが、やっと見つかる。宿のオーナーはベルギーで住んでいたというフィリピン女性で、話を聞いてみると、イフガオ部族出身らしく、近くにあるイフガオ民俗館に案内してくれる。同じ場所にヤンガンの山下神社と言われる慰靈塔があり過酷な状況で敗走した日本兵に祈りを捧げる。帰りに近くの市場で生きたままの鶏を買い、イフガオ流に調理した夕食を頂く。山の中で吠える何十頭もいる野犬の鳴き声に夜は眠れなかつた。

三月二十八日

無事、弔いの旅も終わり、心持ちも軽く、残りの数日は家族で楽しもうと

思い、船に乗り、オランゴ島に渡り、青い空の下、広い透き通る海で泳ぐ。

一日借りた船の先頭の息子ジョセフは

日本でいう小学生だが、学校にも行かず、親について船の仕事をしているのを知り、祖父のように戦時に男子として生まれてきただばかりに戦争に巻き込まれた人達もたくさんいた中、改め込まれた人達もたくさんいた中、改め

て恵まれている自分たちの状況に感謝した。

三月三十一日

フィリピンを後にする。祖父の笑っている顔が目に浮かび、フィリピンを訪れる事ができたことに、また道中の事故などなく無事日本に帰つてこれた事に心から感謝する。

高知県遺族会青年部(次世代の会)の活動について

高知県遺族会青年部副部長 中岡 美佳

高知県遺族会青年部(次世代の会)

にはいられません。

は戦没者の孫を中心に平成三十一年二月に発足しました。それまでに地区の遺族会や各方面の遺族会で活動をして来た人、慰霊祭や慰霊巡拝に参加してきた人等、きっかけは皆それぞれですが、遺児である父や母の姿を見てきて、戦没者への思いを引き継いでいきたいという共通の思いがあります。次にもつなげていくという思いも込めて、

(次世代の会) という名称を発足時にメンバーで話し合つて名付けました。

フィリピン遺族会からも数名が青年部として活動をしていますが、北村直子さんと私が副部長を務めておりま

遺孫と添乗員の間で

南国市 北村 直子

死をしております。七十数年を経て孫

達が一緒に活動をしている…おじい

のフィリピンに慰霊団として行くこと

ができました。私にとつては初めての

▲公私混同▽のお仕事です。コースを

聞き、少しでも青年部が関わつて行く事で出来ればと企画をしたものでした。

昨年度は十一月に四万十市に伺い、

具同地区の忠靈塔の清掃を行いました。併せて四万十市の遺族会の方々と意見交換会を行い、新たな仲間を迎えることも出来ました。

青年部としては、出来るだけ多くの忠靈塔の清掃を行いたい思いがありますが、コロナ禍の中で活動も制限されています。思うような動きが出来ていないのでですが、この秋には芸西地区の忠靈塔の清掃を行う計画で話が進んでおります。

現在、青年部は黒川真介青年部長を中心とした活動企画メンバーで企画・検討し活動を行っていますが、中心となつてするのが忠靈塔の清掃です。

青年部として何か活動が出来ないかを検討した際に、真っ先に上がったのが忠靈塔の清掃についてでした。高知県には数多くの忠靈塔があると聞いています。建立の経緯などは地区によつては様々ですが、どこの地区も遺族の高齢化に伴い維持管理が困難で清掃をする方が少なくなつてゐるという話を

これからも出来る限り、色々な活動をしていきたいと思つてます。私達青年部を見守つていただければ嬉しいかぎりです。

作るところからこの『公私混同』に悩まされました。おじいちゃんが亡くなつた所に行きたい、でも、それは許されないことです。同じ思いの遺族の方々がどれだけ参加されていることか。より多くの方が納得するところで慰霊祭をすることが私の仕事です。出发前は公私の区別をつけなければと思つていたはずですが、母と叔父が参加してくれたことが余計に気を緩ませたのか、旅行中は朝から泣きっぱなしで、完全に団員の一人になつていました。こんな私のことを皆さん「直子ちゃん、直子ちゃん」と呼んでください。頼りにしてくれました(多分)。他のツアーの添乗をしても「添乗員さん」か「北村さん」としか呼ばれませんから、名前で呼んでもらえるのは新鮮で嬉しかったです。慰霊団のツアーは同じ目的で集まつて共感し合うことが多いですから、親戚の集まりのような感覚になつて安心できました。

その後、転勤やら何やらで、暫くフィリピンに行けなかつたのですが、平成二十五年(二〇一三年)、二回目となるフィリピン慰霊団を募集することができました。終戦後六十七年経ちもう慰霊のツアーは今回が最後かも知れないという思いと、あの尾崎前知事がカリラヤでの合同慰霊祭に列席してくださいるということもあつて当初の予定よりも多くの皆さんのが参加してくださいました。初回のツアーから十七年も経つ

ていましたが、皆さん変わらず親戚の集まりのような結束力と温かさでツアーレスは進んで行きます。前回のように泣いてばかりで本来の仕事をしていません。かつたことを猛省した私は、「ふるさと」を合唱しながら次の行程を考え、皆さんの体調を気遣い、親戚の集まりに加わっている議員さん達の様子も伺えるようになつていきました。そして、よいよ最後のカリラヤでの合同慰霊祭の日を迎えます。ここだけは添乗員ではなく、おじいちゃんに会いに来た孫の一人として、遺族として心からの言葉を捧げたい。思いつきり泣きたい。でも、それは叶いませんでした。マイクとスピーカーが壊れたのです。坂本会長のご挨拶も尾崎前知事の追悼の詞も在フィリピン領事館の大便(代理)のお言葉も、参列者の皆さんには聞こえません。早く直さないと、次は順番に皆さんが追悼のことばを述べる番です。いわば慰霊祭のクライマックスです。私はテントからできるだけ離れた所で、現地の音響業者のお兄ちゃんたちを怒鳴りつけていました。私の中の厳肅な雰囲気はもう微塵も無くなつてしまい、おじいちゃんに捧げる追悼のことばは叫び声のようになり、最後の記念写真の顔はどう見ても怒っています。

三回目は平成二十九年(二〇一七年)、いちやんに言われたみたいでした。



高知市鏡小山集落協定行事 「景観作物（あじさい）観賞会」

高知市・鏡小山
川崎事務局長邸

ようです。

川崎家に近づくと、道路沿いの斜面は草が刈られ、色とりどりの満開のあじさいが私たちを迎えてくれました。

一昨年の台風での倒木で、陽当たりもよくなり、花がよく咲くようになった

は十四軒、七十四人で同級生が五人いましたが、現在住んでいる人は一人となつている「ボツンと一人地区」の川崎家に、小山地区関係者や川崎さんの同級生等十六名が集まりました。

子どもの頃二時間かかった小学校通学の行き帰りの話や山里の生活の様子など、想い出話は、あじさいのようにながめました。

高知市内に住んでいる人がほとんどで、子どもの頃に育つた山や川の懐かしい故郷は、いつまでも心の中に残つていました。

「故郷」の歌にもあるように、夢はいつもめぐりて、忘れがたき故郷でした。

一月。「最後の慰霊ツアー」と言われた前回から四年後、「もう一回！」と切望してくださる遺族の方々に背中を押されて催行することができました。そこではヒデコさんという素晴らしいガイドさんに出会えました。過去二回のガイドさんにもお世話をなりましたが、ヒデコさんの知識、熱意、心配りは今まで私がご一緒したどの国のガイドさんよりも優れっていました。是非もう一

度お会いして、彼女から色々なことを学びたいと思います。

まだまだ完璧な『公私混同』ツアーは完成していません。いつの日か参加者が孫、ひ孫だけという日がくるでしょう。それまで続けなければとも思います。青年部の活動と併せて皆さんにお力添えを頂きながら精進してまいります。

今後とも温かく見守ってください。